

# 元旦の行事

新しい年を迎えました。  
年月を重ねていくにしたがい時代も多様化し、正月の過ごし方も随分変わってきました。

元旦といえば、家族揃っておせち料理を食べながらテレビを観て、初詣のついでに買い物をして…というのが現在の典型的な過ごし方ですが、戦前頃までの元旦は、年の初めにあたりさまざまな行事がありました。

まずは床の間には、若年様を祀ります。「若年様」は、「大歳様」正月様ともよばれる年神で、正月に各家にやって来るといって来訪神です。今でも正月には門松や鏡餅、しめ縄などのお供えや飾りをしますが、こ

れはこの若年様をお迎えするためのものです。

若年様を祀るために、床の間には若年様の掛け軸を掛け、その前には米俵二俵にその年に作る粃（もち）を入れ、その上に新しく織ったムシロを敷き、その上に米や餅を入れてしめ飾りをした桶（年桶）と供物をのせた三方を置き、その両側には松やフクラシの枝を立てました。

そして年が明けると、「若水迎え」をします。これは、まだ夜が明ける前に男性が松明や提灯をともし、井戸や湧き水を汲みに行く新年最初の行事です。一家の主が行うところもあり、年男や長男が行うところもあります。若水を汲む桶やひしゃくには、しめ飾りやおひねりをつけます。汲む際にはその年の縁起の良い方角（恵方）を向いたり、縁起の良い言葉を唱えたりすることもあります。

床の間の正月飾り

汲んできた若水はまずは若年様に供え、そしてこの若水で豆殻を焚きつけにしてお茶（福茶）を沸かし、雑煮を作ったりします。男性は若水を汲んだ後、掃き掃除をします。福が外に出ないよ



若水迎えのひしゃくと桶

う、家の中へ掃き込むといえます。

初詣は、朝六時から八時くらい、もしくは午前中に行きました。近くの神社に参ったり、恵方の神社に参ることで厄除けにもなるということ恵方参りをするもありました。子供達は、元旦の午前中は学校に登校し、年頭の挨拶をして校長先生の話を聞き、みかんをもらって帰りました。

こうした家の行事が終わると、親戚や知人の家に挨拶回りを行いました。

また、元旦に家事の仕事をするところもあります。「切り初め」は、鉈や鎌の柄におひねりをくくって、実のなる木の枝を切り、その枝を曲げて縄で縛って家に飾ります。「縫い初め」は、女性の裁縫の仕事で、和紙に糸を通して袋を縫い、その中に米を入れて若年様に供えます。「ない

初め」は、牛の綱や若年様の片足草履を作ったりしました。

今では簡略化・形骸化されて、本来の意味が忘れ去られようとしていますが、元旦の諸行事は、本来はこのような神様や自然に対する深い感謝と願いが込められているのです。



ない初めの牛の綱と若年様の片足草履

※ここで挙げた諸行事は、過去の調査から得られた成果を元にしていますが、町内でも地域や家庭によって内容や呼称、行う日時などに違いがあります。このことをご了承下さい。

参考資料：『鏡野町史「民俗編」』、『上齋原村史「民俗編」』、『奥津町の民俗』、『美作の民俗』、『おばあさんの昔語り』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733